おまもりひまり～稀代の鬼切り役～

雪白兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おまもりひまり～稀代の鬼切り役～

【Ｎコード】
Ｎ２４５１Ｏ

【作者名】
雪白兎

【あらすじ】
天河妃咲は天河家の養子、義弟の天河優人に鬼切り役を譲る為に失踪した、と思ったら野井原に戻ってきて「代行者ならやるよ」と言い出て行った、十年後、優人の十六の誕生日に、現れた妃咲は強く？なっていた・・・妃咲は無事優人に鬼切り役を譲れるのか！？周りは妃咲が鬼切り役だと思ってるけどね

ぷろろーぐ

「んじゃ、そろそろ死んでもらうよ」

「ま、ま――――――」

ザシュ！

（終わりましたね、妃咲様、早く行きましょう、学校に遅れてしまいますよ！）

「あ、うん、解ったよ、行こうか、トラ」

ぽわん！

「了解しました、妃咲様♪」

「こら、腕組まないの、歩きにくいでしょ？」

「大丈夫だもん！」

えっとまず、俺の名前は天河妃咲、普通の高校生さ！ん？普通じゃないだろって？まぁそうだね、簡単に言うと、俺鬼切り役って言う退魔師なんだぜ！・・・代行者だが・・・まぁ退魔師だと解ってくれればいいよ、あと俺の事様付けしてるのが四獣虎丸、俺はトラって呼んでるんだ。「妃咲様、完全に遅刻です！門が閉まってます！転校初日から遅刻はマズいです！」

「ん～仕方ない、トラ、指輪に、俺は飛んでくよ」

「解りました、お気をつけて！」

ぽわん！

トラが指輪になる、トラは人間じゃないのかって？違うよ、俺の討伐対象じゃないから、一緒にいるんだ。

バゴッ！

「ん～？あれは・・・妖か、討つかな」

俺はジャンプで学校の屋上の上のタンクみたいなのまで飛んだ、するとどうだろう、見知った顔の男女が妖に操られてる青年に襲われてるじゃないか、直ぐに助けに行ったさ、それがあんな事になるなんて・・・。「・・・天河の末裔を見つけてみれば己の血も知らぬ小僧・・・ひと思いにその肝食ろうてやろう・・・」

「それは困る、コイツは、私の主（エモノ）だ」

「キ、キミは・・・・・・！」

「あーッ、今朝の誘惑オンナ！？」

俺が出ようとした瞬間に人影が・・・あの長い髪、リボン、安綱・・・あれひまりんじゃないか・・・男の方はやはり優人か、女の方は・・・凛子か・・・ひまりんが優人の方向いた。

「ムダじゃ、主には何もできぬ」

「何者だ？」

「三文妖に名乗る名は持たぬ」

なんか危険な雰囲気だな、行くか。

「我、刃向けるは妖のみ、我、斬り「ストップー！」・・・誰じゃ！？・・・ッ！？」

「・・・何者だ？」

「ん～・・・何者、ねぇ」

「・・・答えろ」

「何者って言われても、鬼切り役代行者としか・・・」

そう、あくまで代行者、本物になろうなんて思わない。

「代行者か・・・」

「まぁ、友人に刃を向けるなら、斬るよ？」

「面白い、代行者如きに「待ってくれ！」・・・」

「なんだい？少年」

「え、えっと、ソイツは友達なんだ、斬らないでくれないか？」

「大丈夫、詳しくは後でね」

「う、うん」

「・・・話は終わりか？行くぞ」

「行くよ、虎丸！鳥丸！亀丸！」

（解りました、妃咲様！行きますよ）

虎丸は戦国無双２の光秀のような純白の刀、鳥丸漆黒の布に桜が書いてある物、亀丸は・・・まぁ普通の感じのだ・・・・・って！変な電波を受信してしまった！まぁ三つ装備した。

「えっ！？なんなの？急に服が変わった・・・って本物の刀！？」

凛子、凄い驚いてる、やっぱり面白いなぁ～♪優人はなんか唖然としてる、ひまりんは・・・固まってる。

「漆黒に桜・・・夜桜か・・・分が悪い」

「逃がさないけどね」

「な――」

ドゴッ！ドスッ！

相手が驚いている間に一気に肉薄し、刀を峰にして操られてる青年に当て、本体が出てきたところを刺して滅した、相手喋る暇無かったよ。

「トラ、戻して」

（解りましたです）

「・・・ふぅ、もう大丈夫、妖はいなグハッ！？」

「なんだったのよ・・・それにアイツは・・・」

あれ？なんで俺ひまりんにタックルされてそのまま連れ去られてるの？それに凛子、まさかまだ忘れてるのかい？

「・・・で、どうして此処に居るのじゃ？若殿」

「やだなぁ、俺は若殿じゃないよ、代行者だよ？」

「私の若殿は主だけじゃ、それよりも何故此処に居るのかと聞いている！」

「・・・もう十六でしょ、優人も、だから鬼切り役を譲らないと、ね」

（妃咲様、ごめんなさいです、転校は明日でした）

「あ、そうなんだ？解った、ありがとね」

ふぅ危なかった、このままだと色々と拙い事になりそうだった、トラに感謝しないと。

「ひまりん、優人をよろしくね」

「・・・はぁ、優人殿が当主に相応しくなったら私は若殿の下に参るぞ、それなら許してやろう」

「解った、ありがと、ひまりん」

なでなで

「・・・にゃ／／／」

俺が頭撫でたら真っ赤になっちゃった、怒ってるのかな。

「じゃ俺は帰るね」

「ぁ・・・わ、解った、それではな／／／」

・・・何故残念そうな顔をするのさ、よく解らないよ。

夜、優人の家の屋根

（妃咲様、ホントに入るですか？）

「うん、寝たいし」

（なら家を売らないで下さい！）

今優人の家の屋根にいるんだ、今から入るとこなんだ、俺が家を売っちゃったから、こんなところに居るんだけどね。

「ごめんごめん、んじゃおじゃましまーす・・・ってあら？」

・・・ひまりんが優人を襲った？のかな、ひまりんと優人が同衾してる・・・なんだろう、イラっとくる、よし、布団を床に敷いて、ひまりんを抱き上げて、布団にひまりん降ろして・・・あ、俺寝れない・・・しゃーないか、ひまりん、おじゃましまーす・・・ぐぅ

（え？妃咲様！？寝ちゃったの？・・・むぅー！トラも寝るぅ！）

ぽわん！がさがさ、ギュッ

「お休みなさいです・・・すぅ、すぅ」

ぷろろーぐｅｎｄ

ぷろろーぐ（後書き）

書きたかった、書いてしまった、反省してるけど後悔はしてない！

人物紹介（前書き）

色々変更〜

人物紹介

天河　妃咲（あまかわ　きさき）

男

十六歳

容姿　イメージは祝福のカンパネラのレスターの髪を黒くした感じ

好きな物　猫、うまい棒、静かな場所

嫌いな物　勉強、苦いもの、騒がしい場所

使用戦闘道具　日本刀『虎丸』匕首『龍丸』和服『鳥丸』下駄『亀丸』

詳細　天河優人の義兄、少年時代を野井原で優人と共に過ごす、が、ある事件の後に失踪、その後各地で目撃情報が出るが、結局発見には至らなかった「まぁ、失踪と言ってもちょくちょく野井原に行ってたし、葬式にもでたんだけどね（本人談）」
天河と名乗っているが、光渡しは使えない、そのため戦闘は我流流派、四聖流を使い、戦う

野井原に居た頃、緋鞠、くえすとのフラグを立てていると同時に優人に立つ筈のフラグを二～三本粉砕している

四聖流　妃咲の編み出した流派、日本刀編と、匕首編がある

四獣（しじゅう）　虎丸（とらまる）

女

？？？歳

容姿　イメージはタユタマのちびましろを虎（猫）ｖｅｒにした感じ

好きな物　天河妃咲、炬燵

嫌いな物　天河妃咲に言い寄る女、冷たい物、苦いもの

使用武器　無し

詳細　妃咲の失踪中に出会った虎、虎といっても小さい猫サイズ、天河妃咲の自称嫁、虎ｖｅｒと指輪ｖｅｒと人間ｖｅｒの姿になれる、妃咲が学校に行くとき、指輪（左手薬指指定）に、それ以外は人間か虎（猫）になる

第1話（前書き）

かなり遅くなったけど

第1話

「がっ、がおーーーっ！？」

「ッ！？」

いきなり何！？確認しようと飛び起きようとしたけど、両腕を押さえつけられる感覚で頭しか上がらず、すぐに寝転んでしまう・・・押さえつけられる？まさか！

左・・・

「すー・・・」

右・・・

「にゃん・・・妃咲様ぁ・・・」

どうしてこうなった？左にひまりん、右にトラ、それに顔上げたときに見えたけどドアの近くで凛子が固まってたぞ・・・不幸だ。

「――――で、アンタ達は誰なの？」

「俺は・・・代行者だけど？」

「私は・・・護り刀じゃが？」

「私は・・・守護獣なのです！」

「そっ、そんなコト聞いてるんじゃないわよぉ！どーして優人の部屋に不法侵入した挙げ句、三人で寝てるのか聞いてるの！」

「どーしてって・・・義兄だからねぇ」

「護り刀じゃからな」

「妃咲様の守護獣だからなのです」

「・・・兄・・・妃咲・・・まさかお姫ちゃん！？」

「あ、やっと思い出した？」

俺は数ヶ月間だけ、凛子と一緒にいた事がある、その時の呼ばれ方がお姫ちゃんだった、妃咲→妃→姫みたいな意味？→妃咲って女っぽいじゃん→お姫ちゃん、らしい。

「「・・・牝、意味不明な呼び方するでない（するなです）！」」

「あっ、アンタ達に言ったわけじゃないわよ！！」

「う・・・う～ん・・・おはよ～」

「あ、俺が優人の兄ってのは優人には内緒ね」

優人起床、現時点で八時二十分、結構遅いよね、しかもひまりんが鬼切り役の事説明し始めちゃったし、トラは俺に寄りかかって寝てるし、朝餉でも作るかな。

俺が料理を作り終えたちょうどその時に優人達が降りてきた、しかも何故か俺がひまりんの兄と認識されていた、トラは俺を様付けしてたからなのか、従者と見られている、トラは何故か嬉しそうだったが・・・とまぁ、そんなこんなで学校に走りながら向かっている・・・食後はゆったりしてたけど、凛子がいきなり遅刻する！って言うから走るしかなかった。

「ほら、走るわよ！」

「ま、待てよ！凛子！」

「あ～、走ってっちゃった・・・ゆっくり行こっか、ひまりん」

「御意じゃ」

「・・・えい！」

「にゃ！？／／／」

ひまりんが堅すぎるからついひまりんの腕に抱きつく。

「わ、若殿？／／／」

「ひまりん、緊張してる？」

「な、なにをじゃ！？／／／」

「学校に行くの」

「べ、別に緊張などせぬ！／／／」

「そっか、まぁ行こうよ♪」

「わ、解った／／／」

「いきなりだが転校生を紹介するぞー野井原緋鞠さんと野井原妃咲君だ、家の都合で今日からの転入だ、みんな仲良くするよーに」

みんなひまりんを見てるな～、いやまぁ少し同じ名字なのを気にしていたけどね、優人も凛子も唖然としてるね～。

「・・・野井原緋鞠じゃ、田舎者ゆえ皆には何かと迷惑をかけるやもしれぬがよろしく頼む」

「野井原妃咲です、よろしくね♪」

うわぁ、見事にひまりんだけを見てるよ、俺の事は無視してるね、みんな、まぁ俺の存在を、あぁ居たねそんな奴、程度に下げる結界張ってるからだけどね。

「席はそうだな・・・」

テクテク

「私は一刻も早く皆のことを知りたいが故、後ろより見渡せるここが良い、お主、席を譲ってはくれぬか？」

「は、はいどうぞ！！」

「すまぬな」

あれ？ひまりんが優人の隣をゲットしてる・・・俺はどこに座ればいいんだよ・・・。

「ん、席はそこでいいな、天河ー慣れるまでお隣さんの力になってやれ。」

「あ、は、はい！」

「んじゃ、終了な、勉強しろよー」

先生は行ってしまった、”俺を置いて”・・・仕方ない、屋上行こ。

「んぁ・・・」

「起きたか、もう学校は終わったぞ若殿」

結局、学校終わるまで寝ていたらしい、そして俺はひまりんの膝枕で寝ている、けどひまりんの寂しそうな顔が気になる・・・。

「・・・ねぇひまりん、なにかあったの？」

ひまりんは驚いた顔を見せたけど、すぐ笑顔になった。

「若殿、気付いていたのか？」

「うん、だってさ、俺に仕えてくれるんでしょ？なら解るよ」

「・・・そうか・・・あの牝に、化け物呼ばわりされた」

「牝・・・凛子か・・・化け物かぁ、だけどひまりん・・・イヤ、ひぃちゃんは女の子だよ、だからもし日本、イヤ世界がひぃちゃんを化け物呼ばわりしても、俺がひぃちゃんの味方をするからさ、それで、許してあげてくれないかな？悪気があったわけじゃ―――」

「若殿・・・本当か？」

「・・・え？」

「本当に・・・味方になってくれるのか？」

「――――勿論、俺はひぃちゃんの味方だよ？」

「・・・ふふっ、あはは♪若殿、絶対に味方になってもらうからな♪」

ギュッ

「んっ、と」

「あと、もうひまりんは禁止じゃな！私の事はひぃちゃんで良い♪」

「うん、解った」

とまぁ、そんなこんなで俺の転入初日は終わった。

そういえば俺の席はどうなるんだろう・・・。

第１話ｅｎｄ

第1話（後書き）

・・・緋鞠への言葉がかなり拙い、寧ろ全てが拙い！

第2話（前書き）

かなり悩んだ末、こんな結果に・・・

第2話

「毒々しくも綺麗な命の花」

ザシュッ

「ギ・・・ッ」

「生の極みと刹那の夢」

ズシャッ

「狂い咲けっ、咲き乱れて儚く散れっ！！」

バシャッ

「いやぁ、悪いね、我らがお猫さまは戦闘狂らしくてさ」

ザシュッ

山の中、ネコミミひぃちゃんが舞うように三下妖どもを切り刻む、
そして俺が謝りながら討ち損じを斬っていく。

「くふ・・・手応えがないぞ、旧十二家の末裔、本気で討ち取ろう
という奴はここにおらぬのか」

「う・・・わ・・・」

ひぃちゃんがものすごいワルな顔で言うから優人が少し恐々してる。

ズルッ

「！！緋ま・・・ッ」

ザンッ

優人がひぃちゃんの後ろに出てきた妖に気付いて叫ぼうとしたけど、ひぃちゃんは振り向かずに切り裂く。

「飽きる、つまらぬ物足りぬ」

「こら、そんな猟奇的になっちゃダメだよ？」

ナデナデ

「ふにゃ！？や、止めぬか！／／／」

優人はなにか考えてる、まぁ此処に至るまでを思い出そう。

「なに？近くの山に遊びに行きたいだって？」

「うむ、そうじゃ、やはり私は山が好きでな、人気がなければなお良い！」

「おいおいひぃちゃん、ワガママ言うなよ」

「むっ、ワガママではない！それに、わ――――兄上も行くのだから問題は無かろう！」

「俺も行くの？」

みたいな事があって、今山の中に居るんだ。

「――――終わったぞ兄上、もうこの近辺に敵対しそうなヤツの気配は無い」

「うん、そうだね、頑張りすぎて疲れちゃった、水浴びしてくるよ、優人のお守り頑張って」

「あ――――解った」

「ほら、ムスッとしないの、じゃあ優人、猫姫と待っててくれ」

「う、うん」

それだけ言って川の方に歩いて行く、ひぃちゃんがムスッとしてたのが気になるけど。

川にはすぐついた、が、どうも体調が悪い・・・こんなの初めてだ・

・・・。

「やっと見つけた・・・なの」

どうやら意識まで朦朧としていたらしい、目の前に女の子が居る事に気がつかなかった。

「君・・・ど、うし――――」

もう自分の声も途切れ途切れに聞こえる、そう感じた直後、意識がブラックアウトした。

「・・・ぶ？・・・・だ・・・・じょ・・・・」

「・・・・ん・・・・」

意識を取り戻したら、広々した湖の前だった、そして隣に緑色の髪の少し具合の悪そうな肌した女の子。

「大丈夫？」

「・・・あぁ、うん、君は？」

「私は静水久って言うの！」

「そっか、よろしくね、しぃちゃん」

「うん！」

（妃咲様！此処の年代を調べたら、百年程前になってます！）

「ぅえええ！？」

「どしたの？」

「あ、いや、なんでもないよ」

「ふーん、お兄ちゃんのお名前は？」

「あ、俺？俺は・・・妃咲だよ」

「解った！妃咲お兄様って呼ぶね！」

「うん、いーよ」

はしゃいでる静水久――しぃちゃんを見ながら考える、トラの空間把握のようなモノは意外と当たるし、風景的にも解る、けど俺に時代移動能力なんて無いし、でも――。

「妃咲お兄様、私、木苺を採りに行くんだけど、お兄様どうするの？」

「――あ、うん俺も行くよ」

「じゃあ行こ！」

木苺採りは何事もなく終わった、そして湖に帰る途中。

「お兄様！早くぅ！」

「待って、しぃちゃん、危ないよ、走ると」

「大丈夫だ・・・も――」

「しぃちゃん？」

「ぁ・・・ぁ・・・」

しぃちゃんが震えだしたのを見て駆け寄ると、目の前は地獄だった、大地は槍のように鋭く尖って何匹もの蛇を貫き、刺し殺された蛇達の近くに居る三人組。

「しぃちゃん、逃げて」

「ぁ・・・お兄様、は？」

「ヤツらを・・・潰す」

「そ、そんな事・・・」

「大丈夫、ただ、もう此処に戻ってきちゃダメだ」

「う・・・うん・・・」

「最後に一つ、もし俺と会えなくても、百年後、天河妃咲、もしくは夜桜って聞いたら、それを頼りに会いに来て、俺は百年後の人間だから、じゃあね」

俺はそれだけ言うと、三人組向かって走り出した、背後から走り去る音を聞きながら。

「ねぇ、おっさん達、なにやってんの？」

一人はゴツい体格のスキンヘッド、一人は髪の長いサムライ？っぽいの、一人はバカでかい手裏剣っぽいの持った幼女。

「なにって、わかんだろ？なぁ」

「あぁ、解るだろ」

「うん、解るね」

「「「妖退治だ」」」

そう言った三人はゆっくりと振り向く。

「んだよ、ガキか、お前やれよ」

「ワシか？」

「私は勘弁」

ゆっくり前に出るサムライ。

「ワシは地走家の――――」

ザシュッ

威嚇で虎丸で斬りつけたが、勢い余って首を落としてしまった、その事に驚愕する二人。

「てめぇ、なにしやがった！」

「そうだそうだ、見えなかったぞ！」

「次、誰？」

二人は少し顔を見合わせると、スキンヘッドが前に出てきた。

「次は俺だ・・・ぜッ！」

ガガッ

「四聖流剣術・瞬・・・」

「はっはぁ！粉々だぜ！バカが！」

スキンヘッドは奇襲のつもりか話してる最中に俺の四方から槍のように尖った大地を突き出して勝利を確信していた。

「四聖流剣術・散・・・」

「な――――」

ザザザッ、バララッ

だから俺は瞬でスキンヘッドの背後に回り、散で切り刻んでやった。

「な、なによそれ・・・あんた何者よ！空須？上櫻？」

「俺はあ――いや、野井原妃咲、夜桜の異名を持っている、四聖流開眼者」

「そんなの・・・知らない・・・」

手裏剣幼女が泣き崩れるのを見ながら、確実に意識が薄れるのを自覚する。

「・・・しぃ・・・ちゃん・・・ごめん」

と言った所で俺の意識はブラックアウトした。

「・・・わ・・・の・・・」

「ん・・・ぁ」

「若・・・の・・・若殿！！」

「・・・ひぃ、ちゃん？」

揺すられる感覚と呼ぶ声を感じながら起きると、半泣きの顔で俺を揺すりながら呼ぶひぃちゃんと、オロオロしてる優人、そして――――静水久・・・しぃちゃんが居た。

「しぃ・・・ちゃん、逃げれたんだ？」

「そう・・・全部お兄様のおかげ・・・なの」

「・・・そっか、良かった・・・」

「お兄様・・・ぐす、ひぐっ・・・ありがとう・・・なの」

「ははっ・・・しぃちゃん、泣いてるよ？」

「当たり前・・・ぐす・・・なの」

「そっか・・・ごめんね」

ギュッ

「う・・・ぁ・・・あああ・・・あああああ・・・ッ」

状況が解らず唖然としてるひぃちゃんと優人そっちのけで、泣き出したしぃちゃんを抱きしめる、けど、体の感覚がないから、寄りかかる、の方が適切だろうけど。

「うえ・・・あああ・・・」

「大丈夫、大丈夫だから、俺は此処に居るよ、ごめんね、百年探しててくれたんだよね」

「お兄様・・・ぐす・・・お兄様！」

「大丈夫、俺はもうどこにも行かないよ、大丈夫だから」

「お兄・・・様・・・」

「寝ちゃったか・・・」

「・・・ハッ！若殿！誰じゃ！この蛇は！」

「・・・この子は・・・静水久・・・百年・・・前に・・・会った・・・」

「若殿！？若殿！・・・寝おったか・・・優人！この二人を連れて帰るぞ！」

「・・・あ、うん」

この後、天河家で目が覚めた俺はひぃちゃんに徹夜で謝罪する事になった。

第2話end

第2話（後書き）

正直過去の静水久の口調が解らないから適当になってしまった

Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！を見てやってみたくなった次回予告

「――――ほれグズグズするな、若殿」

「当然行くよな？優人！？」

「私が選んであげるわ、猫姫さん」

「イヤだぁぁぁぁ！」

「８７・・・まさか８８！？」

「お主は和服は好きか？」

「主の言う化け物は――――――目の前に居る」

第３話

って感じ・・・

この次回予告は仮です、実際に出るかは解りません

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2451o/

おまもりひまり～稀代の鬼切り役～

2010年12月11日14時42分発行